

タイトル	田中綾「あたたかき日光 三浦綾子・光世物語」（北海道新聞社、二〇二三年）
著者	林，香苗； HAYASHI，Kanae
引用	北海学園大学大学院文学研究科(20)：112-118
発行日	2023-12-25

田中綾

『あたたかき日光』^{ひかげ}

三浦綾子・光世物語

(北海道新聞社、二〇一三年)

林 香苗

二〇一二年は、作家三浦綾子生誕一〇〇年の年であり、北海道新聞創刊八〇周年でもあった。この年、綾子のふるさと旭川にある三浦綾子記念文学館と同紙の共同プロジェクトとして、三浦光世が綴った日記(『光世日記』)をもとに同館館長である著者が綾子・光世夫妻の半生を描いた小説が、三月二六日から翌二〇一三年三月一日までの一年に渡り、北海道新聞土曜の朝刊に連載された。この、新聞小説全五〇話が、本書の初出である。二〇一九年から世界各地で猛威を振っていた新型コロナウイルスにより日常が変化し、未来への不安を拭いきれないでいた日々の中で、毎回、

紙面全面に溢れる、夫妻のあたたくもドラマチックな人生の物語が届けられる週末の朝を心待ちにしながら、この一年を過ごしていた多くの愛読者たちの中の、筆者もその一人であった。

著者は長年、近現代文学、特に言論統制と文学史を研究し、近著『非国民文学論』(青弓社、二〇一〇年)では、戦時下の徴兵忌避者や、徴兵を拒まれた人たちが残した作品なども取り上げながら、国家・国民と文学との関係を多角的に論証している。また、北海道新聞「日曜文芸」欄に一四年前から連載中の短歌コラムは、『書棚から歌を』(深夜叢書社、二〇一五年)、『書棚から歌を 二〇一五―二〇二〇』(しまふくろう新書、二〇二一年)の二冊にまとめられ出版されている。更に、三浦綾子記念文学館の二代目館長であった三浦光世の後を継ぎ、二〇一七年から三代目館長を担っている。その著者により、戦中派の「アララギ」歌人でもあった三浦光世の短歌研究も始まった。本書が、その新たな研究の扉を拓いたのである。

ところで、初出のサブタイトルは「光世日記よ

り」である。この「光世日記」とは、光世一四歳の一九三八（昭和一三）年から、最晩年九〇歳の二〇一四（平成二六）年までの七六年間に綴られ、二〇一五年に三浦綾子記念文学館に遺贈された、計六三冊の日記である。これは、三浦文学の背景を知るための重要な資料であると同時に、戦前戦後の北海道に生きた一民衆の貴重な記録でもある。著者が、研究の一環としてこの「光世日記」の調査にあたったのは、二〇一九年の四月から七月までであり、まず着手したのが一九六〇年代の日記であった。本書は、日記に材をとった小説、という形態をとっているが、実質的には、著者による「光世日記」研究の成果発表の場となっているのである。特筆すべきは、その成果ともいえる一四もの新資料が、作中でごく自然に用いられていることである。また、各章末には著者に加え、北海道新聞関係者^{〔1〕}や三浦綾子記念文学館学芸員ら^{〔2〕}が執筆した解説や、作品に引用された「光世日記」の当該ページの写真、新聞記事の一部も併録されている。そして、光世が詠んだ短歌二五首が、未公開のものも含め作中に引用され、その詠歌時の心情が語られながら物語が進行していくのである。このように、歌と散

文を緊密に関わらせていく手法をとった著者は、本書を「歌物語」と位置付けて創作していったように思われる。

本書の構成は、初出時の二部立てから三部に改められた。

第一章 病めるときに既に愛し（全二三話）

第二章 口述筆記の書斎（全一八話）

第三章 いよいよ愛し^{かな} 光世一人語り（全一〇話）

三浦綾子・光世「年譜」三浦綾子記念文学館編

解説 三浦光世日記について 田中 綾

先述の如く、このいずれの章にも「光世日記」の内容がふまえられ、光世の視点で描かれている点が新鮮である。

次に、各章の内容と著者の視点を挙げたい。

第一章では、綾子のデビュー作となる『氷点』が、朝日新聞一千万円懸賞小説に一位入選する前後と、その後の『氷点』狂騒曲のような日々^{〔3〕}が描かれる。「風が、ツルアジサイの白い装飾花を揺らしている。」——この書き出しから一瞬にして、一九六四年六月、旭川郊外の三浦商店で「くるくるとよく働く四十代」の綾子の日常にいきなわれる。爽やかな中にもどこか象徴

的なこの冒頭は、原罪を扱った『氷点』の不気味な始まり―「風は全くない。」と対をなしている。また、「くるくるとよく働く」は、綾子の小説『続氷点』や『母』、『銃口』にも頻出する表現である。ここに、三浦作品に向けられた、著者のオマージュを感じるのである。

また、出逢った時から病床にあった綾子との結婚に至る道のりと、愛に満ちた新婚生活も、この章で描かれる。初夏のある日、二人で川辺を散歩していると、光世が「赤とんぼ」を朗々と歌い出す。近所の子どもたちもついてきて、いつしか夕陽の中での大合唱となるこの場面などは、映画のワンシーンのようでもある。歌を愛し、将棋も好きで、映画「エデンの東」を観れば、その夜ジェームズ・ディーンの顔真似をして綾子の笑みを誘う光世の、人間味溢れる新たな側面に終始引き寄せられるのだが、ディーン演じる青年「キャル」の孤独や苦悩こそ、幼い頃の光世が抱いたそれと重なっていることに気付く。このように、本作の中で著者が散りばめている歌、映画や聖書の一節を紐解いてみることににより、光世が生きた背景を一層深く感じられるようにもなっているのである。読者に、光世のそばにあったそれらの豊かな世界にも、ぜひ触れてほしいと

願う著者の想いも、ここに伝わるのである。

第二章は、結婚から九年が経ち、綾子の作家生活も四年目となる一九六八年から始まる。小説『塩狩峠』以降の綾子の代表作が口述筆記されていく様子が描かれ、各作品の人物造型に、光世の親兄弟が関係していることもうかがえる。逆に、綾子の作品が直接描かれていない話もある。例えば、結婚以来肉親のように慕い、助けられてきた綾子の弟昭夫が、不慮の事故で命を奪われる第七話には、昭夫に向けた光世の挽歌が、五首も引用されている（一一六頁）。第二章では、この場面に至るまで、短歌の引用は無い。だがここで、光世の激しい慟哭が一気に迫り来るのである。五首、たったの五行。短歌にこそ成し得る人間の心の奥深くにある想いの表出が見事な場面であり、この緩急ある短歌の引用にも、著者の熟慮を感じるのである。

また、二〇二二年一月四日の北海道新聞朝刊の第一面に掲載発表された、綾子の未発表の詩「三浦光世に捧げる詩」が引用されるのも、この第二章である（二〇六頁）。

「光は個体になるのだろうか。」から始まるこの詩には、出逢った頃の光世に抱いた印象が、十年間の結婚

生活を経て、「光をさし示しながら共に生きてくれる立派な人間の男だった。」と変化していった綾子の想いが表れている。正にこの章で、著者は光世を「人間の男」として描ききる。母が不在だった幼少期の孤独、貧しく尋常小学校卒業と同時に働いた十代、そして二十代になっても癒えない自身の病。だが、光世の中にもあったこの傷や弱さや負い目は、やがて昇華されていく。一体なぜなのだろう。その理由を見出すことのできるこの小説に、「ビルドゥングスロマン（教養小説）」としての読みどころをも覚えるのである。

第三章では、綾子の晩年と、一九九九年に綾子を天に送った後の出来事が、光世の一人語りにより語られる。この、内容と文体の一致が実に効果的な章である。第一話では、パーキンソン病と診断された綾子の介助が始まる一九九二年までの約一八年間、光世が「光世日記」を勉強のために英語で書き続けていたことや、詩画作家の星野富弘が、綾子との約束通り、二〇〇三年九月二五日に三浦綾子記念文学館を訪れたこと、その翌日に旭川市内で星野の講演があったが、その朝に十勝沖地震が起き驚いたことなどが語られる。後半は、戦争に関わる話題が中心となる。光世が徴兵検査を受

けた一九四四年七月一日と一六日の「光世日記」の記録に基づく検査内容の詳細や、同年九月に国民学校で開催された、陸軍美術展に出品されていた絵画に感銘を受けたこと、その展覧会に小磯良平⁽³⁾が「ビルマ独立式典図」を発表していたこと、三月一〇日の陸軍記念日に、受洗後だったが日露戦争に従軍した祖父が、小学校に呼ばれ皆の前で訓話をしたことも明かされる。戦中の実録としても、価値のある資料である。

次に、これらの新資料の中で、筆者が特に着目した三点を取り上げ、その特徴から本書の資料的価値を解説したい。

第一の新資料は、正岡子規にまつわるエピソードである。先述の如く、光世は幼児期から病がちであった。小学校卒業後、中頓別の営林署に採用されるも、膀胱を悪くし小頓別の実家に帰る。母に付き添われ北海道大学病院で右腎臓の摘出手術を受けたのが、一七歳の時である。だが、四年後に悪化し夜中に起きること五六回。数丁の歩行さえ困難になったのが二四歳の頃だった。その様子は自伝『青春の傷痕^{キズアト}』（フォレストブックス、二〇〇六年）に詳しいが、そこでは光世の胸の内は語られず、周囲への感謝も含め淡々と記されてい

る。ところが、二七歳の誕生日に光世が詠んだ次の短歌が、本書の中で初公開されたのである。

「友ら皆めとり我の^{われ}みめとらずと詠みてし子規が心
慰ばゆ」(四六頁)。つまり、当時光世はその心中を、
近代俳句の創立者にして、闘病の果てに独身のまま
三一歳で夭折した正岡子規のそれと重ね合わせていた、
ということがここで明らかになったのである。この
一九五一年四月五日の「光世日記」全文の写真が章末
に公開されているが(八七頁)、そこには確かに、光
世の筆致で「茶の間から更に廊下に行き日を浴びつゝ、
子規の歌拾ひよむ。」と書かれている。その「子規の
歌」とは、弟子(福田把栗^{はりつ})の結婚を祝い詠んだ五首
(歌集『竹の里歌』所収の「把栗新婚」)のことであつ
た、と著者は解き明かし、作中に引用している。「よき
妻を君は娶^{めと}りぬ妻はあれど殊^{こと}にかなひぬ君が妻 君
に」(四六頁)―最良の妻と出逢い結ばれた弟子を、心
から祝福する一方で、子規の複雑な想いも秘められた
歌である。そこに自身の心との繋がりを感じたことで、
この時期の病める光世は、どれほど勇気づけられたこ
とであろう。しかも、その三年後に、よもや自身にも
「殊にかなひぬ」妻との運命的な出逢いが待ち受けて

いようとは、思いもよらなかったはずである。そして
その「妻」に勧められ、子規を源流とする「アララギ」
に、やがて入会することになろうことも。

第二の新資料は、「青いヒヤシンス」と、映画「野ば
ら」に関するエピソードである。「年は明け、一九五八
年。／二人が出逢つてからほぼ三年。綾子には回復の
兆しが見える一方、急に幻覚や幻聴が起り、一時は
札幌の病院に入院する事態にもなっていた。」(七四頁)
から始まる第一章二話には、体の弱い二人の結婚を
当初は案じていた光世の兄が、自身が育てた青いヒヤ
シンスを綾子に届けにきたことが綴られている。その
花言葉は「変わらぬ愛」であり、綾子はすぐに、光世
の勤める営林局に喜びの電話をかけた。二人の結婚ま
での道のりが、決して順風満帆ではなかったこと、だ
が次第に、家族が応援してくれるようになっていった
過程と喜びが、光世の視点で綴られる。

その後、二人は初めて病床から出て映画館に出か
け、「野ばら」を観たことも、同年一〇月二三日の「光
世日記」により明らかになった。光世を感動させた
「ラストシーン」が作中に蘇る。そこには、映画の中
でウィーン少年合唱団のボーイ・ソプラノが独唱し

た「陽の輝く日」の歌詞が載せられているが、その中の「太陽がほほ笑みかけるなら／心は安らぎ／どんな苦勞もなくなるさ」に着目したのである。著者は、「二人には、自分たちへのはなむけの言葉のようにも思われた。」(七七頁)と綴る。これらは、二人の出会いから結婚までの道のりが、光世の側から照らされた資料として、綾子の自伝小説『道ありき』と今後対をなすものとなるであろう。

第三の新資料は、光世の、韓国への想いに関するエピソードである。第三章九話では、「神と人間」をテーマに激動の昭和が描かれた、三浦綾子文学の集大成にして遺言とも言われる大河小説『銃口』について語られる。その舞台公演が二〇〇五年一〇、一一月にソウルで行われ、光世も現地向かった。「日本の過ちを謝罪したい」と願っていた綾子の想いをカーテンコールで届けたこと、韓国の観客がこの演劇に日本人の「良心」を感じ、自分たちの歴史とも重ねて共鳴してくれた喜びが綴られている。その様子は、『銃口』が架けた日韓の橋『新日本出版社、二〇〇六年』に詳しいが、この時期の光世が、同世代作家の岡部伊都子^④や、朴敏那^⑤ら韓国人作家の作品を読み込んでいた

ことが、今回明らかになった。特に朴慶南^⑥が記した、関東大震災の時、三百人あまりの朝鮮人を助けた大川常吉警察署長の逸話は、『銃口』の主人公北森竜太が、徴兵された満州で韓国人青年金俊明により命を救われた場面と重なる。そして、晩年の光世がなお韓国の情勢を見つめ、この国の人々に心を寄せ続けていたことがうかがえるのである。このような記録が今後更に発見されれば、韓国をはじめとする海外における、三浦作品の伝播と受容が研究される際の、糸口となるであろう。

この「光世日記」研究が、今後一層深められていくことを期待する。三浦文学の背景が、光世の視点からも分析できるようになれば、作品読解の新たな可能性が出て来るからである。また、我が国でも稀有な「口述筆記」が三浦文学にもたらす、文体と作品内容の関わりに関する研究が始まれば、本書はそれに寄与するものとなるだろう。やがて、終戦八〇年を迎えるこの世界は、未だ絶え間ない戦争に揺れている。三浦文学は、人間が苦難や国家権力の不条理に対峙する中で、それでも人間として人間らしく生きる道を、一貫して問い続けた。それらが生まれた瞬間、瞬間のドキュメ

ンタリーである本作の続編を、切望してやまない。

(はやし かなえ・北海学園大学大学院修士課程)

【註】

(1) 古家昌伸、赤木国香

(2) 長友あゆみ、難波真実

(3) 後に、三浦綾子の『積木の箱』の挿絵や、『銃口』の装画に使われた代表作「斉唱」を手がけた、日本を代表する画家。

(4) 『遺言のつもりでー伊都子一生 語り下ろし』(藤原書房、二〇〇六年)

(5) 『鉄条網に咲いたツルバラー韓国女性8人のライフストーリー』(大畑龍次訳・監修、同時代社、二〇〇七年)

(6) 『ポッカリ月が出ましたら』(三五館、二〇〇六年)

